

皆様おはようございます。1月も、はや折り返しを過ぎました。寒い日が続きましたがお元気でいらっしゃいましたでしょうか。

広島県の新型コロナウイルスの蔓延拡大が日々続いておりますが、ぜひとも皆様お気をつけいただき、お元気で過ごされますようお祈りいたしております。イエス様の御降誕をお祝いして以来、福音書からイエス様のお働きを読み進めております。イースターまで使徒言行録から離れて福音書から学びたく願っております。

そのような中、ヨハネ4章にて、サマリアの女性に救いを伝えになったイエス様の出来事読んでまいりました。今日の個所でユダヤ人たちはイエスを迫害し始め、ますますイエスを殺そうと狙うようになったとありますけれども、まさにこれはヨハネの福音書にこうあります通りです。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

この御言葉が実現している出来事のように思われます。

そのような中ヨハネ4章イエスは旅に疲れたと6節に書いてあるこの言葉が私たちの胸を打ちます。旅に疲れたというこの言葉は、その暑いところを歩いてきて肉体的な疲れと覚え渴きを覚えられたと言うこと以外にも、ご自分の国に来たのにご自分の民が受け入れなかった、拒絶した、楯ついて受け入れなかったそのことからくる旅の疲れなのではないか、そのようなものを指しているように思われるのです。

そこにサマリアの女性がやってきました。この人はほかの人たちに顔向けできないと思っていて、人目を避けて水汲みの重労働を、昼日中に昼の12時にしている人でした。

そんな女性にイエス様は水を飲ませてくださいと語りかける中であって会話が始まります。そしてこの人はメシアを待望している人だったということがわかります。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」と、この女性は語りました。

一生懸命このサマリアの地で礼拝を捧げたところで、エルサレムの人からは自分たちははみ出し者だと思われていて、相手にされないし、避けられ、軽蔑されていて、神様から切り捨てられていると思っていました。そのような中「キリストと呼ばれるメシアが来られ、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」という事を信じて、慰めと救いが私たちでも得られるのではないかと願っていたのです。

そ 21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。

23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

4:24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」そうするならばこのサマリア、北イスラエルの首都でもないエルサレムの神殿でもないこのサマリアで、イエス様の十字架の贖いによってただその功績によって、悔いた心から、心の底から霊と真理とを持って神様を礼拝しようとする人は皆迎えられる。その時をやって来るんだと言う、慰め深いメッセージを聞いて、女性は自分のしてきたことを当てたとすることもあって、「それ(メシア)は、あなたと話をしているこのわたしである。」ということ聞いて女性はすっかりと嬉しくなりました。

このように、ユダヤ人から避けられているサマリア人、そしてサマリア人の中からも疎んじられているこの私にメシアが会ってくださったと言う事の喜びのゆえに、彼女は大切な水瓶を置いてでも、あんなに割けていた人々の前にも出て、この方こそメシアかもしれないとお伝えするようになりました。

神様から切り捨てられたと思われていた、その墮落していると家に言われていたその地にあってもメシアを待ち望み、そしてイエス様に会って喜んで他の人たちに語らずにいられないと言う、神様は喜ばしい出会いを備えていてくださいました。信仰にある出会いを備えていてくださいました。

そのことから「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」と語られたのではないのでしょうか。

どうしてユダヤ人たちはわが民はあそこまで頑なのか。旅の疲れ、喉の渇きを覚える連続だったのではないのでしょうか。

その中であつた、サマリアの土地でのこの素晴らしい出会い。それは我が食べ物のように心の中に喜びと元気を与え活力を与え、私を生かす神様からの力であつたに違いありません。

「遣わされた方の御業を成し遂げるため」に私は父なる神様から食べ物を用意していただいている。それは口からとって命を支える心地よい糧のように、良き出会いであり、そして喜びを充足感を感じさせるものであり、そして迫害の中にあつても守られているという感覚であり、そうして、遣わされ、用いられて私を必要としている一人の方との出会いが備えられているという事。これこそが我が食べ物。私を元気付けてこれからも導いて下さる神様のお力であり、これに縋ろう。私に食べ物を備えて生かし、励まし、遣わされた業に進ま

せてくださってありがとうございますと、イエス様はこの出会いに慰めを得て進まれたのです。

役人の息子を癒すと言う所においても、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と話す父に対して、「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」と語られたところ、「その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。」という、こういう信仰的な出会いが備えられていました。信じて家に帰ろうと帰って行ったこの男性は、信じた通り、自らの愛する子供が癒されているの見る事となりました。

イエス様が確かに神様から遣わされて、救いと恵みと祝福のために来て下さったということを感じる人は幸いです。

今日もベトサダの池で38年も病気で苦しんでる人との出会いがありました。そこで水の動くのを待っていたわけです。み使いがこの池に降りてきて水を動かすことがあってその水が動いたとき真っ先に池に入るものはどんな病気にかかっているか癒されたとあります。しかしこの人は38年の間誰も手伝ってそこに入れてくれる人がいなかったのです。むしろ我先にと後から後から来る人に先を越され、そして孤独の中で悲しみ苦しみ悔しい思いをし続けてきました。そして遣わされたイエス様がついにこの人の前に立ってくださいました。

6 イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であることを知って、「良くなりたいか」と言われた。

良くなりたからずっとこの所を離れないで38年もの長きにわたってチャンスを探して助けをひたすら願ってきたのです。この場所に良くなりたがために挑戦し続けていたこの人に対して、良くなりたかと言われたら誰でも戸惑うのではないのでしょうか。

7 病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」

これが実に世の中の現実かもしれません。我先に我先にと競争社会の中にあって進む人々。あなたは長いこと患っているから お先に行きなさい、あなたを先に入れてあげましようと言ってくれる人は38年の中に誰もいなかったという事は非常に寂しいことです。38年。あまりにも長い年月を、この人は孤独に自分の病と闘い孤独と戦っていました。そこにイエス様がお越しく下さいました。本当に良くなりたのか。ちゃんと努力しているのか。なんでそんな長い間伏せているのか。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」私はどうしようもない存在です。誰が私を助けて下さるのでしょうか。

人のうちに、全く救われる余地が見つからない時にも、神様は救い主を遣わしてください。

8 イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」

この言葉は先程の長いことよくなりたいたいと思いながらもそのチャンスがなかった人に「良くなりたいか」と、冷たく突き放したような傍観者的な言葉のようにも思えます。起き上がりなさいと言われても、そうできる物ならばとつくに…と思ったかもしれません。理解しがたい言葉であったと思われても仕方がないのですが、聖書はここでは、その立ち上がれという言葉に呼応したから癒されたとは書いていません。

5:8 イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」

5:9 すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。その日は安息日であった。

その人はすぐに良くなったからこそ床を担いで歩き出すことができるようになったのです。イエス様はあたかも元気な人に「起き上がって床を担いで歩きなさい」と言っておられるようです。神様はそのように、38年の間、人間にはどうすることもできなかったことを易々と解決なさることがお出来になります。

ベトザタというのは哀れみの家と言う意味があります。しかしこの人にとっては38年の間その憐れみに触れることは出来ませんでした。彼は周りの人を恨めしく思ったかもしれません。どうしてこんなにも長くいるのに自分を先にしてくれるような優しさがいないのかと思ったことでしょう。

しかしついにその時がやってきて、イエス様の方から彼に歩み寄って下さり、彼の「良くなりたいたい」との気持ちを引き上げて下さいました。

しかしその日は安息日でした。そこでユダヤ人たちは、病気を癒していただいた人に対して、語りました。

10 そこで、ユダヤ人たちは病気をいやしていただいた人に言った。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない。」

5:11 しかし、その人は、「わたしをいやして下さった方が、『床を担いで歩きなさい』と言われたのです」と答えた。

5:12 彼らは、「お前に『床を担いで歩きなさい』と言ったのはだれだ」と尋ねた。

5:13 しかし、病気をいやしていただいた人は、それがだれであるか知らなかった。イエスは、群衆がそこにいる間に、立ち去られたからである。

5:14 その後、イエスは、神殿の境内でこの人に出会って言われた。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない。」

5:15 この人は立ち去って、自分をいやしたのはイエスだと、ユダヤ人たちに知らせた。

5:16 そのために、ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。

ユダヤ人たちははイエスを迫害し始めます。イエス様は安息日にこの人を癒したならば問題が起こるという事を分かった上でこの人を癒してくださいました。

「良くなる」「健康になる」「健全になる」という言葉が今日の個所に5回登場します。(6節・9節11節・14節15節)

この38年病気の中にいた人に対してイエス様が何度も何度も心を注いで癒されるように元気になるようにと願っておられたことがわかります。仮にそれが迫害の受ける出来事のきっかけになろうともイエス様は恐れる事はありませんでした。

17 イエスはお答えになった。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」

5:18 このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった。イエスが安息日を破るだけでなく、神を御自分の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされたからである。

「父は今もなお働いておられる」。あわれみの業を休もうとはされず、安息も取らずに日夜まどろむこともなく私たちを見守っていて下さいます。(詩編121:3)

たった今、この瞬間もあわれみ深く、人を助け救うために父なる神は働いておられます。働き続けて止むことなく、働いておられます。

そういうお方が私を遣わし、その方のみこころを成し遂げたいから私も働くのだとイエス様は語られます。イエス様は父なる神さまと共に、いつも休むことなくまどろむことなく私たちが健康で進むことができるように導き守っていて下さいます。

神様は私たちに律法をお与えになりました。律法を守るようにと神様はお言いつけになられました。しかし神様は人のために律法を作られたのであって律法のために人を作られたのではないと言うことを今日また教わりました。

ヤコブ2:13 人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。

38年も苦しみ続けたこの人。今日も駄目だった、そしてまた今日も駄目だったと毎日苦しんだ人にとって、主は一日たりともその救いを遅らせることをなさいません。

安息日、あなたは立ち上がっていけない、床に伏せっ続けなければならないと、神様は冷酷に言い放つ方ものではないということを学びます。神様はあわれみに満ち溢れ、愛と癒しの業を安息日でもなさってくださいます。自分の身を危険にさらしても、私たちの救いのために身を乗り出してください、健康を与え、苦痛をこれ以上一日も伸ばしたくないと考えて下さるお方です。そうであれば、そういう方であれば、私たちにとって、神様はすぐに答えて下さらない、祈りに聞いて下さらないという事ではなくて、そういう神様が尚も私たちのために何かのご計画があつてそうしておられるのだと思うことが出来ます。

主なる神様は今日に至るまで休むことなく私たちのために働き続けていてくださるお方です。そしてイエス様もまた私たちのために働き続けてくださいましたし、今も父なる神さまと共に私たちのことを弁護して祈っていて下さいます。

次は私たちがそのイエス様のあわれみのゆえに働き続けておられるお働きと共に、遣わされて神様のために働き続ける時です。良くなるために、健康になるために、癒されるために、孤独で助けてくれる人がなくそして助ける人が来てくれることを待ち望んで長い間伏せっ立ち上がることもできない方々のために、神様と共に働くときです。イエス様は迫害をもまた殺意を受けることをも恐れずにこの人を助ける道へと向かってくださいました。私たちがまた神様が今もなおそのように働いていて下さるのなら私も働くのだと、このように気持ちを新たにさせていただきたいと願います。